

200歳万歳!

200歳まで生きる会
平成20年7月・第26号

「食は命なり」「心身一如」を基本理念に、創業五十一年目になります当社の食生活改善活動を、医師たちのご指導のもと、全国展開している会社です。私は二代目として、この理念を心より受け継いで、当社の主力製品である「発芽黒大豆寿元」と「玄米食」を三十五年食し、健康を取り戻し、快適に過ごしています。

さて、当社の長年製造し、全国に発送しています「寿元」について、ご説明したいと思います。

「寿元」の原料は国産黒大豆です(黄大豆寿元もあります)。昔は黄大豆は、食品用(豆腐、納豆、醤油、みそ等)に利用され、黒大豆は、漢方的に利用されてきました。大豆は畑の肉と言われている通り、タン白質が多く、また油もとれるし、炭水化物も豊富です。

しかし「寿元」には、この三大栄養素はほとんど含有されていないのです。むしろ、三大栄養素を利用して、発芽にかかわる大豆生因子だけを抽出して、製品化したものです。従って低カロリーで、食しておいしく飽きない味です。「寿元」につきましての医師達の見方、考え方を次に書いてみます。

富山医科薬科大学名誉教授の、田澤賢次先生は、寿元と霊芝の、体を痛めつける活性酸素消却の比較実験をいたしました。

その結果、黒大豆寿元濃縮液体を十倍、二十倍、五十倍に薄めても、寿元は霊芝より活性酸素消却能力があるという結果が出て、田澤先生は驚いておられました。

佐藤内科医院院長 佐藤巳代吉先生は「長年患者さんに寿元を与え、食事を正して診療した結果、寿元は体の酸化傾向を是正し、瘀血を改善して、組織の新陳代謝を亢進し、生活習慣病の改善に大きく関与することが明らかにになった」と講演会で話されています。

小児内科医の故西政次医師は「これから妊娠する可能性のある方は、健康な赤ちゃんを産むためにぜひおすすしたい食品です。寿元ベビーは十数年にわたって観察していますが、皆さん優秀な赤ちゃんばかりです。最近全国的に寿元ベビーの出生が増える傾向にあり大変喜んでおります」と語っておられます。まだ他に多数の医師達のコメントを書きたいのですが、紙面の関係でまとめます。

寿元の目的は代謝を良好にすることです。病人は代謝不良がほとんど原因していると、故鈴木弘一医師が主張していましたが、長年患者さんに寿元を与え、食指導した結果、代謝が良くなる事を発表されています。

入れることより出すことが、いかに重要かを力説され、それから良い食べものを入れるということ喝破されていました。長年にわたり多くの体験がありますが、私自身も病氣をもっていましたし、母の高血圧、そして子どもの難病も食事改善、玄米、寿元で克服し、健康のありがたさを実感しています。

全国の愛用者の大多数の方々は、顔色が良くなり、体温が上がったと言われています。ジュゲン(株)が支援しています、「明

日の健康を考える会」では、医師によりまず無料の健康相談も、毎月東京・池袋にて開催されておりますので、お気軽にご利用いただければ幸と思います。皆様の健康長寿を心より祈念いたしております。

小森建系(こもりけんけい)

- 1943年 北海道旭川生まれ
- 1961年 ジュゲン株式会社入社
創業者、加藤林四郎氏に師事する
- 1973年 明日の健康を考える会理事に就任する
鈴木弘一医師に師事し食養を学ぶ
- 1974年 子どもの難病を寿元、玄米、食養生で
1年2か月で完治する
- 1981年 ジュゲン株式会社代表取締役役に就任する

〒244-0813 横浜市戸塚区舞岡町429番地
電話 045-822-8848 / FAX 045-822-7055
明日の健康を考える会



特集

長寿遺伝子をオンにする

人間の遺伝子の中に、サーターという長寿遺伝子があることがわかりました。サーターを発見したのは、アメリカのボストンにあるマサチューセッツ工科大学の、分子生物学者レオナルド・ガレンデ博士です。

博士はこの発見のために、ノーベル賞に一番近い学者と言われています。これまでは長寿遺伝子などはないと思われていたのです。遺伝子に対する従来の考えは、チャールズ・ダーウィンの自然選択説が常識だったのです。これは生まれたときに寿命は決まっているという考え方で、生存と繁殖に優れた性質を持つ個体は生き延び、より多くの子孫を残すという訳です。つまり人生の後半では、固体の優劣はもう決まっています、宿命的でどうにもならないという考え方です。

そこでガレンデ博士が1991年にこの研究を始めたとき、まわりの研究者たちは反対しました。生まれてからは遺伝子の選択は行われなない。ただ肉体的機能が衰えていくのみ。それが老化というもので特定の長寿遺伝子などはないという考え方が、学者の間でも普通だったのです。

けれどもガレンデ博士は、マウスや赤猿などが、カロリー制限をすると生き延びることを知っていました。これはつまり老化を抑制する

ことができるということ、そこには遺伝子の働きがあるのではないかと考えたのです。そこで博士は酵母菌の研究から始めました。酵母菌の細胞はたった一個です。人間は60兆の細胞があります。そして人間の遺伝子は2万3000個あるのに対して、酵母菌は5000個なので研究しやすいと考えたのです。

そこで酵母菌でまず実験をしました。カロリー制限をすると酵母菌は生き延びます。逆に増やすと早死にします。その違いの中でサーターという長寿遺伝子が働くことを発見しました。

そこで酵母菌の中でサーターを除くと早死にします。逆に増やすと長生きしたのです。これこそ求めている長寿遺伝子だと思い、長さ1ミリの線虫でも実験しました。線虫にもサーター遺伝子が認められ、これを操作することによってサーターを増やすと、線虫の寿命は1.5倍に延びました。

博士は哺乳動物にもサーター遺伝子があり、この遺伝子こそ長寿遺伝子であることをつきとめたのです。反対にダフツと呼ばれる変異体遺伝子があり、この発現を抑制すると寿命が延びることがわかっていました。そこでダフツは老化をすすめ、サーターは反対の活動をする

と知ったのです。博士はこの研究を8年かけて行い、1999年に発表したときは、アメリカのテレビ局は歴史的な発見だとして、博士の新しい発見を大々的に報道しました。

サーターの役割は次のようなものと見られています。

- ① 細胞を修復するタンパク質の活性化
- ② 細胞の死、つまりアポトーシスの抑制
- ③ 生命の維持に必要なエネルギーをつくり出すミトコンドリアの制御など。

カロリー制限とサーター

サーター遺伝子は普通の状態ではスイッチオフになっています。ではそれをどうすればオンにすることができるのでしょうか。それはカロリー制限をすることによってオンにすることができます。カロリーを減らすと長生きできるのです。

ウイスコンシン大学では猿でこの実験をしました。普通にエサを与えた猿と、ビタミンなどの栄養分を与えながら、カロリーを30パーセント減らした猿では、カロリーを減らした猿の方が毛並みに色つやがあり、白髪や顔のしわも少なく若々しさを保ちました。カロリー制限をすると細胞レベルで老化が抑制されることがわかったのです。この影にはサーターがオンにされるという秘密が働いていたのです。マウスの実験ではカロリーを60パーセントに抑えると寿命が1.3倍に延びることがわかりました。

カロリー制限をするとミトコンドリアがNAD (nicotinamide adenine dinucleotide) ニコチンアミド・アデニン・ジヌクレオチドの略で、補酵素の一種を大量に吐き出し、これが細胞核の中に入って、サーター遺伝子の周りにとりつき、サーターを活性化することがわかったのです。

ミトコンドリアもこれで老化に関して重要な働きをしていることがわかります。

聖路加病院の日野原重明先生は、1日1300キロカロリーの食事に抑えられているそうです。しかし減らしすぎは、骨密度や免疫機能低下を招くので注意しなければなりません。ガレンデ博士は1800〜2200キロカロリーでよい。その代わり軽い運動をするのがよいとすすめています。博士は食事と運動のバランスが大切だと言います。それに人生の展望の見通しを持つことが大事。この3点セットが大事だといえます。博士はさらに、脂肪に注意すること。飽和脂肪酸をさけ、不飽和脂肪酸（博士のおすすめはアーモンド、カシューナッツ）を取ることで。プラス野菜果物を取ることをすすめています。

野菜や果物の皮に含まれるレスベラトロール（天然の抗酸化物質）がサートゥーをオンにするというのです。レスベラトロールは赤ワインにも含まれます。

世界がアンチエイジングの研究に力を入れ始めた

100年前世界の先進国の平均寿命は40歳でした。それが今は80歳にもなり、100歳を越して生きる人の数が増えてきました。日本は1981年では100歳以上の人は1000人でしたが、今では100歳を超える人が3万人いるといわれます。世界的に高齢化社会になってきつつあるのです。

そこで老後をいかに生きるか、健康長寿の研究はますます切実になってきていて、アンチエ

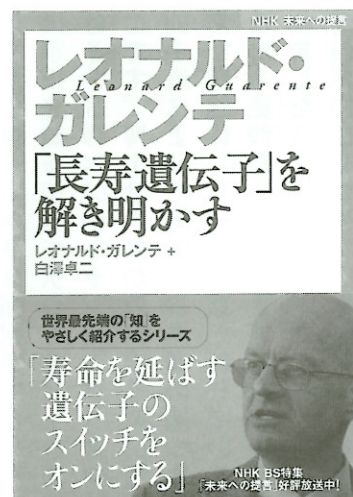
イジングの研究が世界的に必要とされるようになってきたのです。

老化による病気を防ぐことは、国の医療費の節減にもつながります。老化は、老化そのものが病気の最大の原因だと考えられ、老化のメカニズムの解明が分子レベルで行われるようになって、いかに老化を防ぐかが研究の大きなテーマになっているのです。

ガレンデ博士は言います。腹八分はまだダメ、腹七分、六分目が長寿の条件で、運動をするのが大切だと。高齢期になると筋肉が萎縮します。そのため歩行機能が低下し、転倒率が上がります。ですから、運動や下半身中心に筋力トレーニングが必要であると言うのです。

このように生活習慣を改善することが必要です。努力なしの長寿はありえないのです。食べただけ食べて、運動はしない。これではサートゥーはオフになったままです。筋力トレーニングが健康遺伝子をオンにすると言われますが、節食と日々の訓練がサートゥーをオンにするのです。遺伝子と生活様式の関係がこれまで明らかでなかったのが、今はアンチエイジングの研究がすすみ、はっきりしてきたのです。

ガレンデ博士が、このように、生活様式が長寿遺伝子を活性化するメカニズムを、初めて明らかにしたのです。博士は言います。「サートゥー遺伝子を活性化する長寿薬の開発は可能だが、食事の摂取カロリーを控え、定期的に運動をし、自らのサートゥー遺伝子を活性化している人より、その長寿薬を飲んだ人の方が長生きになることはないだろう」



トピックス

コーカサスの長寿者たち

世界三大長寿地域のひとつにコーカサスがあります。コーカサスの人達はどうのような生活様式を持っているのでしょうか。

一番大切なのは食べものです。長寿地域の人々の一日の平均的メニューをのぞいてみましょう。

朝食…ヨーグルト、チーズ、豆、野菜サラダ、薬草茶

昼食…赤ワイン、果物、ママリーガ（とうもろこしの粉から作ったお粥）、牛肉（たまに）、豆の煮物、チーズ、漬物、野菜サラダ、紅茶か薬草茶（昼食が一番ポリウムがある）紅茶に砂糖は入れない。蜂蜜かドライフルーツを入れる。

夕食…チーズ、ヨーグルト、果物が中心で夜は非常に少量。

彼らの食事の特徴としてアルメニア産の岩塩

を使い、1日の塩分摂取量は相当なものになる。毎日多食しているチーズにも塩がたくさん入っており、塩辛い。

長寿者達は農作業や牧畜などかなりの重労働をしているが、全体的に食事の量は少なく2000キロカロリー以下。満腹になるまでは決して食べない。牛肉は週に1、2回、昼食時に100〜150グラム程度。焼肉は食べず、ポイルして脂肪を抜いた肉を食べる。

コーカサスの長寿者達の長寿に一番貢献している食べものは、整腸作用に優れているチーズ、ナドヒ（ヨーグルトの上澄み）、マツオニ（ヨーグルト）などの乳製品だとされます。これらは炎症や腫瘍発生の要因になる大腸菌やクレブヒエラなどの悪玉菌を減少させ、腸内の免疫細胞を刺激して免疫力を促進し、さらにビフィズス菌や乳酸菌の増殖を促すとされています。

長寿者達は皆働き者で、決して働きすぎることはなく、毎日同じ量の仕事をしている。



塩の大切さ

塩は健康上、必須の一番大切な物質なのです。塩は体液の浸透圧を一定に保ち、水分の代謝や

体液のPHを一定に保つ。神経の伝達に關与する。筋肉の収縮作用に必須である。胃液、腸液、胆汁などの原料となる。体内の有害物質を解毒する。新陳代謝を促して体温を上げるなどの働きがあり、逆に塩分不足で新陳代謝が悪くなり、体温が低下するのです。日本人が最近低体温化しているのは、極端な塩分の制限に原因があると言われます。ガンの発生率が激増しているのも塩分の制限のため、なぜならガン細胞は35度の低体温で一番増殖するからと言われるのです。（石原結實医学博士）

運動と寿命

運動不足も体温を下げます。といって激しい運動はいけません。激しい運動は、かえって寿命を縮めます。ジョギングはやめた方がいい、と石原先生言います。ジョギングブームの火付け役になった米国のクーパー博士や、J・フィックスはともにジョギング中に心筋梗塞で死亡しました。スポーツをしている時の突然死の順位はジョギングが第1位で、25パーセントを占め、続いてゴルフのプレイ中、水泳中の順になるそうです。

高齢者には、ウォーキングやスクワット、腹筋運動で腹筋を鍛えることが非常によいことがわかっています。老化は筋肉の衰えと比例するのです。筋力が衰えると姿勢も前かがみになり、老化はさらに進んでいきます。老人になつて前かがみの姿勢になるのは、背中の筋肉や下肢の筋肉の衰えからたらされるのです。超健康と超長寿を得るための、とても大切な要素のひとつ

つが、筋力を維持すること、筋肉を鍛錬することにあるのです。

コーカサスの長寿者達は毎日よく歩くこと、農作業をすることで筋力を保ち続けているのです。

健康情報

水晶を使った遠隔療法（テレセラピー）

水晶には病気を治す偉大な力があります。水晶からは癒す力の強い宇宙光線が放出されているのです。水晶で痛みのある箇所をこすると、消しゴムで消すように痛みが消えていきます。たとえば、気管支に痛みがあれば、気管支の部分をこすればよいのです。

足の膝が腫れ、曲げたり歩いたりするのに痛みがあったAさんは、水晶で痛い部分をこすると、1時間もしないうちに膝の腫れがひき、痛みが消えて歩けるようになりました。腰痛や歯痛にも目覚ましい効果があります。水晶が痛みを吸い取ってくれるような感じで消えていくのです。

この宇宙光線を使ってテレセラピーを開発したのはインドのベノイトツシュ・バツタチャリア博士です。博士は水晶が放出する宇宙光線を機械的手段によって放射し、患者の持つオーラを正常な状態にし、結果として現れている病を根っこから絶つという、今までにない手法を確立されました。

宇宙の万物は七つの宇宙光線から成り立って

いて、人体もこの七つの宇宙光線によって成り立っているのです。この七光線の状態がバランスがよければ、美しいオーラが人体から放たれておりその人は健康です。しかし、少しでもバランスが崩れると、そのアンバランスが病状となつて現れます。一つ二つの光線の過不足からは特に深刻な状態は起こりません。しかしいくつもの光線のアンバランスが生じると重病となるのです。

この光線の不足を人体に保有する最も良い材料が、実は天然の宝石です。その効果には目覚ましいものがありますが、まだ日本ではよく知られていません。

博士は「ラジエスティア」(放射感受性)の研究者でした。それは「すべてのものは振動しており、固有の周波数を持って、微細のエネルギーを放射している。人もまたエネルギーの凝縮されたものであり、エネルギーを放出している。そのエネルギーの放出に異常をきたしているのが病気である」という考え方です。

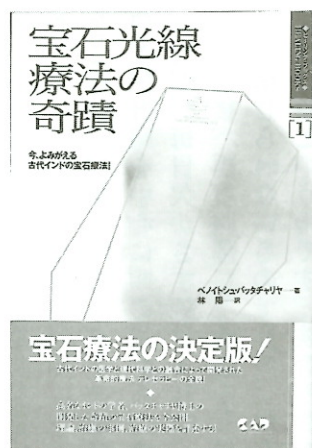
博士は真冬のある日、いたずら好きな子どもたちが、生後3か月ほどの子猫を何度も氷水につけ、瀕死の状態にしてしまった出来事を目にしました。子猫は肺炎を起こし、何らかの処置をしなければ、数分うちに死ぬことは明らかでした。水晶振り子によって治療をする方法を学んでいた博士は、ヒマラヤ水晶を糸に吊るした振り子を手にとって、子猫に向けて回転させました。

1200回回転させた時に子猫の頭の毛が立

ち始め、間もなく頭がふつくらとしてきたのです。2000回過ぎると、子猫の尾っぽを除いて全身の毛が膨らみ始め、生き生きとしてきました。

3000回を越すと尾も麻痺状態から抜けて、全身が膨らみました。子猫はため息をついて寝返りを打ち、やがてゆっくり歩き始めました。初めはよろめいて何度か倒れましたが、最後には治療台の端に向かってゆっくり歩き、床に飛び降りました。

この体験が博士のテレセラピーの新しい体系作りの発端となったのです。その知識は人から得たものではなく、小さな子猫から得たものだったのです。



手動でなく機械で放出

その後別の子猫が病気になる、食物を拒んでやせ衰え、身動きもできないほどになりました。この時まで博士は1個の水晶円盤をファン・モーターに設置したものを作っていたのです。手動ではたいへんなので、機械で放出したらどうかと考えたのです。

この円盤には重さ1トナほどの水晶球が4

個はめ込まれています。

博士は子猫を箱に入れ、水晶盤を上にかざして、毎日12時間反時計回りにモーターをフル回転させました。この実験は手動と同じ効果が得られるかどうかを確認するためのものでした。ラジエスティアでは、人の意志が重要な治療要因になるとされていたのを、機械だけで同じ効果が出るかを試したかったのです。

モーターは毎分1400回転するように作られていました。子猫は24時間こん睡状態にありましたが、翌日には意識を戻し鳴き始めました。ミルクを少し与えるとよくなめました。3日目には完全に回復し、箱から出ていました。

博士は次の実験で、テーブルの上に患者の写真を置き、子猫の時と同じく反時計回りに水晶盤を回転させました。すると写真の色が変わることを発見しました。水晶から出る光線が、写真に反応することがわかったのです。

ちょうどその頃、博士の娘の一人が100日咳にかかり、薬が効かず、病態が悪化するばかりで、苦しんでいたのです。博士は、娘の写真をモーターの前に貼り、水晶を回転させてみました。すると、2時間で完治したのです。リズムで光線の変化を観察していた博士は、「治療前には、娘の写真は緑色だったのに、治療を始めると青色に変わり、本人の顔も青色になった」という事実を発見しました。このことから博士は、水晶を回転させることによって、水晶に内在する青色光線が放出され、それが写真に注がれ、同時に本人にも届くことを確認しました。

すべての病気はエネルギーのブロックから生じるものです。細胞は物質からなっています。細胞が収縮すると細胞内の物質が細胞外のエネルギーに流れこみます。細胞が膨張すると細胞の外にあるエネルギーが、細胞の内側にある物質に変容を与えます。細胞レベルにある物質とエネルギー間のバランスが整っていると健康であり、そのバランスが崩れると影響が細胞レベルに現れ、バランスの変容、しこり（ブロック）として体に現れるのです。

病気を解くのは細胞間のエネルギーの過多、過少のバランスをどう解くかにかかっています。通常、病気の85パーセントは90パーセントはエネルギーの過多から起こっているといわれ、だからそのエネルギーを解くために水晶の振りを反時計回りに回転させるのがよいのです。筋肉の萎縮、骨粗鬆症、アルツハイマーなどはエネルギーの不足から起こっているとされ、この場合には振りを時計回りに回転させるのがよいのです。病気は細胞間のブロックを解けば治るし、不足している場合にはエネルギーを補えばよいのです。

バイタルモーター21

このような機械が身近にないものでしょうか。実は、会員の西海惇先生が作られたバイタルモーター21が、まさにそれに似た機械なのです。バイタルモーター21には円盤に6個の水晶がはめ込まれていて、これが1分間に2000回、右回りでも、左回りにでも回転するように作られています。バイタルモーターで、物質

界レベルの病気が癒せるのです。

バイタルモーター21を使ってよくなったという実例をいくつか紹介しましょう。

K. A. さん（58歳）の話です。

健康診断のつもりで腹部CT検査を受けたところ、肝臓の前面に悪性の腫瘍が10センチ以上、それも右葉と左葉にあるため手術は不可能で、カテーテル治療もがんの位置が悪く無理だということです。放置すれば5か月、どんなに持っても8か月の命と最後通告を言い渡されました。

ところが、バイタルモーターの治療を知り、一日2回肝臓を中心に頭の前からつま先まで、約1時間、毎日欠かさず続けました。

1か月後、再度腹部CT検査を受けた結果は、とても信じられないものでした。がん細胞が壊死しているのです。検査の数値は健康値を示し、現在は病をすっかり忘れ、ライフワークのボランティア活動に日々あけられているということです。



バイタルモーター 21

次は、A. K. さん（22歳）の話です。

ある日、突然めまいに襲われ、緊急入院しました。病名は脳出血。3か月後の診断は、脳腫瘍と診断されました。そこで、頭から30センチ40センチ離してオルゴンエネルギーを頭に受けながら、1時間寝るというヒーリング法を続けました。

そして、1か月後検査をすると、手術する必要がなくなりました。脳腫瘍は消えてなくなっていました。

長生き物語

伝説の長寿者たち

伝説の長寿達をいろいろな文献を元に見つけていきましょう。旧約聖書を見るとヤコブは147歳、モーゼは120歳まで生きたことがわかります。

医学の祖ギリシャのヒポクラテスは109歳まで生きたと言われています。数学者のピタゴラスは99歳まで生きました。

スコッチウイスキーの「オールド・パー」のラベルでおなじみのトーマス・パーは、152歳まで生き、その長寿を英王室よりたたえられ、バッキンガム宮殿で山海の珍味のごちそうのもてなしを受けました。その時料理を食べ過ぎて、腸閉塞を起こし急死したと伝えられます。

デンマークのヤコブセン・ドラゲンベルグは145歳まで生きました。コーカサス地方のアゼルバイジャン共和国生まれのヒラリ・ミスリモフは168歳で死亡し、この時日本の一流紙はトピックスとして彼の死を伝えました。

有名な『長命術』という本を書いたドイツの医学者フーフェランド教授は、この本に、1797年に160歳で死んだヨセフ・サーリントンの例を書いています。フーフェランド教授はこの本の中で天寿200歳説を唱えています。最近でも200歳説を唱える学者が出てきました。米国カリフォルニアの「ゲロン」研究所のハリー博士は「200歳まで生きることとは生物学的見地からも不可能でない」と研究結果を発表しています。

日本の慶長時代の医師曲直瀬玄朔の書いた「延寿撮要」という医書があります。この本には天寿180歳説を唱え、その養生法を書いています。その中に次のような文が見えます。

「飽満して即臥すべからず。久しく立つは骨やぶる。久しく行くは節をやぶる。久しく座すれば、肉やぶる。久しく臥せば、氣をやぶる。あかず飢えざるほどに食すべし。晩飯をひかゆれば命長し。晩飯の後、庭に出て静かに歩すべし。」

日本の養生本の一つ古いものは曲直瀬道三の「養生物語」であるとされ、これは400年も前の安土桃山時代に書かれたものだろうとされています。この本に食養生として、日本人は

「米、味噌、鮮魚」など自分の土地でできるもので、しかも先祖以来食いつけたものを食べるのがよい。外国人が何を食べようとそんなことをまねる必要はない。日本人と外国人は体質を異にしているもので、外国人の食べているものは必ずしも日本人に適しているとは限らないと言っています。バター、チーズ、ハム、ソーセージなどでなければ栄養食品でないとかがえている今の日本人にとっては、まさに専門の一針と言わねばでしょう。

イギリスのイーストンという学者は1799年に、ロンドンから「人間の長生きに関して」という本を出し、世界各国から中古以来、長寿者1712人の例を集め次のような表を作りました。

100歳〜110歳まで	1310人
111歳〜120歳まで	277人
121歳〜130歳まで	84人
131歳〜140歳まで	26人
141歳〜150歳まで	7人
151歳〜160歳まで	3人
161歳〜170歳まで	2人
171歳〜185歳まで	3人

ハレルという学者は1778年に詳しい歴史的調査をして130歳から140歳までの年齢に達した人の例を15例、141歳から150歳までの例を6例、169歳の例を1例あげています。169歳まで生きたのはイギリスの漁

夫シンキンスという男性で、生存中ある事件の証人として裁判所に召喚されたとき、102歳と100歳の二人の子どもを同伴したと言われます。ハレルも200歳天寿説を唱えていたのです。

こうしてみると、私たちの「200歳まで生きる会」も、そこまで生きられるという生き方が見えてくるようです。

良書推薦コーナー

『これまでの医学常識を覆す水素水の世界』

林秀光著／現代書林／1,365円(税込)

これまでは酸素の世界でした。が今は水素の世界に入ったといわれるのです。酸素の世界ではどうしても解決できなかったことが、水素の世界では容易に解決できるようになると著者は言います。

実例で見てみましょう。愛知県江南市のNさんは73歳で、40年ほど前にリュウマチになり散々苦しみ抜きました。強い薬で死ぬほどのめにあい、両足の手術もしました。その後遺症に苦しみ右足首は30年腫れたまま、常に股関節に違和感がありました。水素を飲んで2か月ほどたつと、今では痛みは何も感じなくなりました。お腹もスツキリし、食欲も出てきました。こんなに安くてよいものなら年金生活の人にも教えてあげられると喜んでいます。

酸素の世界では解決が極めて難しいと思われる課題が、水素の世界においては簡単に解決できてしまうというのはまさにこのような例をいうのです。お金がなくて病気が直せないというのは酸素の世界の話なのです。水素の世界では1か月500円程度でよいというのですから、年金生活者でも困らないわけです。

5歳の女の子が、てんかん症状を起こしていました。1日に10回以上のてんかんを起こし、抗てんかん薬を服用し、以後29歳まで服用を続け、それでも1週間に1回程度起床時に軽い発作が続いていました。3年ほど前から甲状腺機能障害を指摘されたのをきっかけに、水素水の服用を積極的に始めたのです。するとてんかん症状の発作が目に見えて少なくなっていきました。おかげで無事に結婚もでき、子どもも無事に生まれ喜ばれたということです。

私たちは高校の化学の時間に「水の中に水素は含まれていない」という事実を学びます。実際に水の中には水素は含まれていないのです。

仮に水素の含まれた水を作ってもその水素はすぐに失われてしまうことになります。ではどうしたら水素水が飲めるというのでしょうか。

水素が病気に関与しているという論文は、日本以外には見当たらないそうです。それは日本の水と外国の水の違いにあるのだそうです。外国の水は硬水なのに、日本の水は超軟水と呼ばれる水だからだそうです。研究しようにも外国には日本の水がないわけです。日本でできたアルカリイオン水製造機をアメリカに持ち込んで電解を始めても数分で電源が切れてしまうそうです。電解水生成器は超軟水国日本だからこそ生まれた機器だったのです。

水素の研究は日本だからこそ進んだという理由がおわかりでしょうか。

無病世界とは水素世界なのです。ペットとしてめだかを飼っている人が興味半分に水槽の中に、水素発生ミネラルスティックを1本投入しておいたところ、その後しばらくして、めだかの数がやたらに増えてきたことに気づき驚いたそうです。

イタチに似た動物にフェレットという小動物がいるそうです。その動物の飼い主さんの話です。フェレットがすい臓ガンにかかり、腹水までたまるようになり、獣医さんお話では1週間もつまいというものでした。たまたま水素発生スティックのことを知り、スティックを投入した水素豊富水を飲ませたところ、目に見えて

改善し、1か月もたたないうちに腹水も消失、ガンも消えてしまったということです。左足が壊疽になって、患部の切断手術が必要とされた64歳の女性が、ペットボトルにスティックを入れた水素豊富水を飲むようになると、39度あった熱も下がり、高かった血圧も下がり、壊疽も手術の必要がなくなったそうです。

編集後記

最近、アンチエイジングが世界的話題になってきました。テレビでもよく取り上げられます。今月号には、「サーツ」という長寿遺伝子の話を取り上げましたが、先日テレビでも取り上げていました。

長寿の秘訣は、どうやら小食にあるようです。サーツ遺伝子は、普通の食事をしていては、オフの状態にあるらしいのです。小食にし、カロリを制限するとオンになるというのです。腹八分目が健康に良いといわれますが、本当は六分目くらいがさらに良いようです。

こうして、「200歳 万歳」を編集していると、そんな結論が見えてきます。一日3食より2食、2食より1食が良い。そんな結論になりそうです。



世界初「水素水理論」の決定版
究極のワンコイン健康法
あらゆる病気の原因となる
活性酸素を消去する水が自宅で簡単にできる!

現代書林

【発行人】

七田 眞

【発行所】

「200歳まで生きる会」

〒695-0011

島根県江津市江津町527-15

☎0855-5215301

FAX 0855-5215797